

「心豊かに、生きる力をはぐくむ教育の研究」

～学ぶ意欲を持ち、共に学び合う集団の育成を意図して～

I 研究の内容

今年度も、「新指導要領の施行」を意識した教育活動を展開しながら、生徒の人間関係形成能力を伸長させ、学力向上へと繋げていくことを主眼に置いた研究の実践を図った。継続とは、その実践を行うまでのプロセスの検証を行い、手法を吟味し、実践、後の変容を分析し次の手立てを模索していく（P D C Aサイクル）とそのスパイラル化が重要であると考えた。昨年度までの研究を、更に今の生徒に効果的にはたらかせていくことこそが真の継続であることが考える。そこで『どんな力をつけさせたいか』『どこに主眼を置くか』『どのような過程で力をつけさせていくか』『何を仕組むか』を確認しながら取り組みを行っていくことが不可欠であり。多忙の中おろそかにしがちであるこのことを、効率的・効果的に行っていくことが、研究を深める上で重要であると考えた。

☆ 本校の研究の柱と新指導要領との関わり…

- 意欲的に学ぶ集団づくり ⇔ 主体的・対話的で深い学び
- 授業づくり、授業改善 ⇔ 生きて働く知識・技能の習得
- 学びの主体となる生徒の「質的」向上 ⇔ 学びに向かう力・人間性の涵養

本校の学校教育における意識の中心に「学校は勉強するところ」を置き、「よりよい集団づくり」と「授業の構造化」に焦点をあて、本年度も全校一丸となって実践してきた。そのなかで、主体的に学習に取り組む態度の育成、思考力、判断力、表現力の育成、さらに学習意欲、学習習慣の構築と定着、家庭学習の習慣化の更なる深化が課題と考えた。

研究目標を説明すると学級集団づくりを基盤として、学力向上を目指していくものである。学級集団と学力向上の2点に相関があることが明らかにされており、今までの研究からも学級集団が良好であると生徒の本来持っている能力以上に学力が向上し、定着することは明らかであり、全国学力把握調査・県学力状況調査の結果に裏付けられる。

「ベストを尽くす塩中」をスローガンに、「塩中魂」「塩中生の生活規範」を掲げ、学級や学年など、共に学ぶ仲間との関係を構築していくための授業や諸活動の充実を目指し、「学ぶ意欲を持ち、共に学び合う集団の育成」を図るための取り組みとして、前年度までの研究を引き継ぎながら、より効果的に、効率的に研究実践を高めるための手立てを模索しながら、研究の推進に努めた。

II 研究の柱となる具体的内容と方法

1 意欲的に学ぶ集団づくりに関わって

- (1) 学びの場として、基本となる授業規律の確立。(S S T)
- (2) 「hyper Q-U(よりよい学校生活と友だちづくりのためのアンケート)」の実施と分析(K 1 3法)・活用。
- (3) 「話し合いのルール」を生徒会と連携して周知→「学びの集会」を実施。
- (4) 学級集団におけるルールとリレーションの育成。→(グルグルSGE トキドキS S T)

2 各教科における現状の把握とそれに伴う指導方法の改善に関わって

- (1) 各種検査、試験の分析による生徒の実態把握と指導方法の改善。(Q-Uの活用)
- (2) 各種検査、試験の分析から課題をとらえ「ステップアップ授業」の授業研究に活かす。
- (3) 「hyper Q-U」による集団分析→集団の型に合った授業の展開を仕組む。(授業の構造化)
 - ① 『めあて』の提示と学習の流れの説明する。
 - ② 計画的板書する中で『キーワード』を提示し、学習の重点の提示と本時のまとめを行う。

- ③ 『デザインシート』を活用し、単元の学習を記録する。
 - (4) 実技教科における指導目標の明確化。
 - (5) 評価方法の検討。
- 3 学びの主体となる生徒の「質的」向上に関わって
- (1) 学力向上への取り組み。(家庭学習の習慣化とステップアップノートの活用)
生徒会によるステップアップテスト、自主学習ノートの取り組みの充実。
 - (2) 道徳教育の充実による生徒の情操の育成。
 - (3) 国語力向上の取り組みの継続。

4 研究授業の実施(一人一実践)

上記1～3に対していずれか踏まえ、研究の検証の場として全職員が一人一実践として、「ステップアップ授業」を実施し授業を公開する事によりお互いの研究を深化させた。

Ⅲ 成果と課題

1 成果

- (1) 学級の状況に合った学級集団づくり(対人スキルの育成をねらいとする)のために、全校一斉に、意図的・定期的にSST, SGE実施。2回目のQ-Uの分析をみても、どのクラスも1回目より方が学級満足群に属する生徒の割合が、全国平均より明らかに高い数値を示している。これは、分析的に行い、意図して個や集団に働きかけたり、手立てをしたり、不満足群や非承認群の生徒に対する働きかけを工夫しながら手立てを促すことにより、安心して過ごせる集団であるという意識に変わってきている成果であると考え。また、学級枠を超えた集団活動においても、同様な指導が期待でき、同様な活動が行えるという安心感が、より生徒のやる気を発揮させる活動へとつながっていると考える。生徒の変容は、活動ばかりではなく行事終了時に振り返りとして行う「共同絵画」などにも顕著に表れており、「よりよい集団づくり」への取り組みは、確実に結実していると考えられる。
- (2) 学級の状態に合った授業の構造化は、学習の目的意識がしっかり持つことができ段階的定着を図ることにより効果的な学習成果が期待できるとともに、生徒も集中して授業に臨むことができていた。また、Q-U座席表を基に、意図的な小集団を活用した話し合い活動の活用により、「学び合い」「教え合い」が深まり、主体的・対話的な深い学びへと繋がってきていると考える。

2 まとめと課題

甲州市「確かな学力育成」プロジェクトを基盤とし、それを深化させるべく研究を推進し、「よりよい集団づくり」が、各場面で成果として現れつつある。また、授業の基盤である「授業の構造化」が定着し、どの授業も安心してのぞみその成果も着実に付いてきている。このような取り組みの成果が着実に成果にも表れ、全国学力・学習状況調査の結果でも、県平均、全国平均を上まわる結果となった。また、質問紙においても教師、学校への信頼度はかなり高いものと考察することができ、研究の方向性の信憑性を示すものとなっている。

今後更に伸ばしていくために、各学年工夫して取り組んできた家庭学習の効果的な持ち方、意欲の喚起については、まだまだ課題も多く、家庭との連携の工夫は不可欠であると考えられ、目的意識を高める手立ても重要である。また、授業の質を高めるためにITC環境の充実と、既存施設の活用の工夫が重要になる。さらには、平成31年度より新指導要領、特別な教科『道徳』の施行を目前にし、本校のカリキュラムマネジメントが不可欠と考えられ、そのようなことを踏まえて、今後も深化研究を継続し、質を高めていくことが大切であると考え。

(研究主任 小林 誠治)